

演劇的手法を用いたコミュニケーション教育の地域全体への展開と中期的効果検証

平田知之（芸術文化観光専門職大学 芸術文化観光学部 講師）

研究の概要

I 量的な効果検証

- 1 兵庫県北部の豊岡市が位置する但馬地域（豊岡市、養父市、朝来市、香美町、新温泉町）では、2021年に開学した芸術文化観光専門職大学に所属する演劇の専門家が、すべての高等学校等（全定通、特別支援、高等専修学校）の高校1年生を対象に、コミュニケーション能力の育成を目的とした演劇ワークショップを実施
- 2 豊岡市のすべての小学校6年生、中学校1年生で、担任の先生が同趣旨の演劇ワークショップを実施
- 3 1のワークショップの前後で、豊岡市の小中学校の出身者と非出身者の自己肯定感意識尺度を質問紙で調査し比較

II 地域全体で展開する芸術家による非認知能力向上を目指した演劇ワークショップのファシリテーターの意識に関する質的調査

- 1 豊岡市では2022年から、東京在住の卓越したファシリテーターが主講師をつとめ、その指導のもと、地域の演劇の専門家が主講師、サブ講師をつとめる、非認知能力のうち「協働性」「自己効力感」「やり抜く力」の向上を目指した演劇ワークショップを、市内のすべての小学校1年生に実施（2024年度から2年生も対象に拡大）
- 2 1のワークショップのうち、全体の6割強にあたる17の小学校で、ワークショップの観察を継続的に実施
- 3 2の観察で得られたメモをもとに、東京在住の卓越したファシリテーターに、8日間にわたる非構成的インタビューを実施

研究の結果

I

- 1 豊岡市の小・中学校で全校実施している、演劇を活用したコミュニケーション教育の効果は、自己肯定感尺度について一定程度残っているが、出身市町に拘わらず、小学校で演劇授業の体験があったと自認している生徒の方が、効果が残っている率がより高かった。中学校についてはそうでもなかった。
- 2 小学校での演劇授業体験の効果の差は、高校で複数回のワークショップを体験することで縮まった。

II

卓越したファシリテーターは、以下の10のポイントを押さえていることが分かった

- 1 児童生徒の見取りのための事前準備
- 2 児童生徒の状態にあった目標の動的な生成
- 3 児童生徒の抱える課題を解決するタイミングの判断
- 4 問題行動（友だちの邪魔をする、否定的な発言をする、等）をする児童生徒への状況に合わせた対応
- 5 児童生徒の状況に応じた、成長を促す「そそり立つ壁」の用意
- 6 児童生徒の状況に応じたファシリテーションの変化
- 7 グループワークをサポートするための問いの調整
- 8 目的と機能を意識した的確なコメント
- 9 チームファシリテーションでの役割の分担
- 10 ファシリテーションの引き時の意識

今後の課題と展望

今回の量的調査は、先生が実施するワークショップの効果を、芸術家が実施するワークショップの現場で検証する形となった。7年後には、小学校で芸術家に触れた児童が高校に進学する。その時には、IIで検証したような専門家によるワークショップの効果の中期的な検証が可能になるであろう。